

小学校5年生のとき、デッサン集に描かれた石膏像に憧れて、いつか本物の石膏像を目の前にしてデッサンしてみたいと思いました。そのことは今でも昨日のことのよう思い出します。しかし小学生だった私には石膏像を買う余裕はなく、ひたすら誰かが描いた石膏デッサン集を見て、描かれた石膏像を模写していました。誰かが描いた石膏像を模写することで、本物の石膏像の姿を想像していました。中学生のとき、自画像を描いていたのですが、うまくいきませんでした。そこで私は美術の教科書に載っていた西洋絵画の人物をまねて、その顔を半分くらい自分の自画像に上書きしながら描きました。それは結果的に《半分の自画像》という絵画作品になりました。高校生のとき、山積みの牛骨に付いている血をひたすら磨き続けるパフォーマンスアーティストに出会いました。理由もなく自分自身がどこかに引き摺り出されたような感覚を覚えました。私は初めて、自分自身が「社会の中で生きている」ということを認識しました。住んでいたアパート、通学バスから見える風景、食べているご飯、生活の全ての景色が違って見えたのです。私はその日以来、自分自身でパフォーマンスを行ってみようと考えました。

いま、私はアーティストとして活動しています。改めて自分にとって表現とは何かを振り返ってみると、それはいつも何かと出会うことだったのかもしれませんが。出会うことで、その出会った存在と自分の関係を考え続けてきたのかもしれませんが。そして表現することは、その出会いによって現れる「さまざまな私」に再び出会うことでもありました。それは自己表現と呼ぶのでしょうか。自分ひとりでこの世界に存在することは不可能なはずなのに、いつも自分ひとりがこの世界の中にポツリと立っていることを想像してしまうのです。

今回のユースプログラムでは、「ピクニック」というテーマを設けました。ピクニックと聞くと、みんなはどんな場所を思い浮かべるでしょうか。その思い浮かべた場所は、あなたの家からどれくらい離れているでしょうか。そこに行くためには、徒歩でしょうか、自転車でしょうか、それとも電車でしょうか。

ピクニックとは、まずは家から外に出ること。

ピクニックとは、遠くもなく近くもない場所。

ピクニックとは、全く知らない場所でもなく、知っている場所でもない。

それは「私」をめぐる境界のような場所なのかもしれません。